

# 研究者による展示解説“ガイドツアー”を通じた来館者エンゲージメント向上の試み

## —地質標本館での実践—

産業技術総合研究所 地質標本館 地質標本館室運営グループ

瀬口 寛樹 福田 和幸

## 1. はじめに

地質標本館は産総研地質調査総合センター（GSJ）の普及施設として、最新の地質研究成果を展示・解説している。近年、同館では来館者エンゲージメントの向上を目的として、GSJ 研究者が展示の一部を対話形式で紹介する「ガイドツアー」を実施している。この取り組みは、研究者が直接来館者とコミュニケーションを取りながら専門的知見を共有する点に特徴があり、展示理解を深めるだけでなく、来館者が疑問をその場で質問したり、研究者と意見を交わしたりできる“学びと発見が生まれる場”を生み出している。

一方で、専門性とわかりやすさの両立、参加者層に応じた内容調整といった運営上の課題も浮かび上がった。例えば、地質に関する基礎知識を持つ参加者と初学者が混在する場合には、説明の深度や話す順序に工夫が求められ、専門的な話題に踏み込みつつも、来館者が置き去りにならない配慮が必要である。また、研究者がそれぞれの専門性を活かしつつ、一般来館者の興味を引き出す語り方を磨くことも課題の一つとして挙げられる。

本稿では、ガイドツアーの概要および具体的な実施例を紹介するとともに、参加者の反応や運営上の工夫を踏まえて課題を整理し、今後の展望を考察する。

## 2. ガイドツアーの概要

ガイドツアーは、専門研究者とともに約1時間館内をめぐり、展示物の背景や研究の視点を共有することで、来館者が地質学をより多面的に理解し、主体的に学ぶことを目指すプログラムである。地質標本館では、展示解説に関心があり、館の活動に協力することが可能なGSJ 研究者を「地質標本館展示解説登録者」として登録しており、ガイドツアーではこの「地質標本館展示解説登録者」を中心にガイド役を依頼している。また最近ではGSJの新人研究者のアウトリーチ研修の一環として「一点解説」と称する短時間のガイドツアーを新人研究者に依頼することもある。ガイド役の研究者は自身の研究分野や専門性を踏まえてテーマ設定を行い、展

示とどのように結びつけて話すかを自主的に企画したうえでツアーを担当する。そのため、各回で取り上げられる視点や解説の深さに個性が生まれ、ガイドツアーの多様性につながっている。

このプログラムでは、研究者が展示物に潜むストーリーを紐解き、来館者は専門家の視点や研究の現場に近い思考を体験できる。そのため、展示を「見る」だけでなく、「理解し対話する」プロセスが生まれ、来館者の興味関心を喚起する点に来館者エンゲージメント向上の効果が認められる。

### 3. ガイドツアーの実施例

地質標本館では2015年のガイドツアー開始以降、延べ22回のガイドツアーを実施しており、ここでは2025年3月8日に実施した第23回のガイドツアー（図1）を紹介する。

この回では、4名の研究者がそれぞれ異なるテーマで計4回のツアーを担当した。定員はいずれも15名とし、ウェブサイトで事前予約を受け付けたところ、数時間で満席となる回があるなど、高い需要が確認された。ガイドツアーが来館者に認知され、定着しつつあることがうかがえた。



図1 2025年3月8日開催のポスター

#### 1) 「地震と活断層のはなし」

地震計の紹介から始まり、日本列島周辺の地震発生の仕組み、津波堆積物や活断層のはぎ取り標本、3D プロジェクションマッピングを活用した構造線・活断層の解説など（写真1）、複合的な視覚教材を用いた説明が行われた。

#### 2) 「石と地質図のはなし」

花崗岩の話題を導入に、岩石・鉱物の基本や地質図作成のプロセスを紹介し、地質図が研究者の長年の調査の積み重ねによって成立することを伝えた。

#### 3) 「鉱物の形と結晶の形」

鉱物の形態と結晶構造の関係を講義形式で説明した後、実物標本を観察し、さらに偏光板を用いた複屈折を体験してもらうことで、理解の深化を図った。



写真1 ガイドツアーの様子

#### 4) 「温泉と地熱のはなし」

3D プロジェクションマッピングや火山模型を用いて温泉形成機構を視覚的に説明し、地熱発電へと話題を広げた。特に温泉周辺の地熱現象に関する質疑が活発に行われた。

#### 5) 参加者の反応

アンケートでは「展示だけでは理解できなかった点がよくわかった」「専門家と対話できたことが貴重だった」など肯定的な意見が多く、来館者エンゲージメント向上の効果が裏付けられた。また、「野外での一日ツアー」の提案など、研究者との交流を求める声も見られた。

## 4. 課題

ガイドツアーの実施により得られた課題は以下の通りである。

### 1) 専門性とわかりやすさの両立

高度な専門知識をどの程度まで平易化するかは担当研究者の判断に依存し、参加者の理解度に差が生じやすい。特に専門的背景を持つ参加者と初学者が混在する場合には、説明の階層化が求められる。

→対応策：ツアーごとに対象層の前提知識を把握し、導入部分で基礎的な説明を行った上で専門的话题へ段階的に進める。補助資料や簡易解説パネルの活用も有効である。

### 2) 参加者層に応じた柔軟な内容調整

子ども連れ、大学生、専門家志望者など、参加者層が多様化する中で、適切なボリューム・難易度調整が課題となる。

→対応策：事前アンケートや予約時の選択項目を活用し、参加者層に応じてツアーの説明レベルや体験活動の深さを調整する。小グループでの解説やワークショップ型の導入も検討する。

### 3) 研究者の解説スキルの育成

専門性が高いほど一般向けの説明が難しく、話し方・構成・質問応答など、来館者向け解説力の向上が必要となる。

→対応策：模擬ツアーを実施しフィードバックを重ねていくことや、参加者アンケートを活用した振り返りも有効である。

## 5. 考察

ガイドツアーは、来館者が研究者と直接対話することで、展示物への理解を深めるだけでなく、研究への興味や学びの意欲を高めるという点で、来館者エンゲージメント向上に大きな役割を果たしている。特に進路に迷う学生や将来地学を学ぼうとする高校生からは「研究者の志

---

望理由」などキャリアに関する質問が寄せられ、展示を超えて研究者との対話そのものが重要な価値を持つことが明らかとなった。

また、新たな試みである新人研究者による「一点解説」では、研究者の専門性を一点に絞って深く紹介する形式が参加者に好評であり、GSJ 研究者のアウトリーチ活動の研修機会としても有効で、専門性を活かしつつわかりやすい解説を行う訓練の場としても機能する。

課題としては、説明レベルの段階化、視覚教材のさらなる活用、参加者属性に応じたツアーのバリエーション化などを進めることで、より多様な層の来館者の関心に応えるプログラムへ発展させる余地がある。

## 6. まとめ

地質標本館のガイドツアーは、研究者による対話型解説を通じて、来館者の理解の深化と学習意欲の向上を実現する取り組みであり、来館者エンゲージメント向上に大きく寄与している。一方で、専門性とわかりやすさの両立、参加者層への調整、解説スキルの強化といった課題も残されている。

今後は、これらの課題に対応しつつ、展示の価値を最大限に伝える工夫や、研究者と来館者の交流機会をさらに充実させることで、地質学の魅力をより広く普及させることが期待される。地質標本館は引き続き研究成果の発信と来館者エンゲージメントの推進に努め、多様な来館者にとって「学びと発見が生まれる場」を提供していく。